

六十三年 三月 札幌市産婦人科医会退任
家族構成

二十五年 四月 妻佐々木芳江と結婚

三人の子供に恵まれそれぞれ独立している

執筆者は平成十一年六月に全抑協札幌支部に入会し、翌十二年四月役員改選の時に支部理事に就任した。慰藉事業の地方慰霊祭、展示会等の開催について積極的に参加協力されている。
現在も理事として活躍しております。

(北海道 森 英一)

異国の空に

シベリア抑留の記録

北海道 東 島 房 治

樺太逢坂捕虜収容所

逢坂の収容所には約一千人の兵士が収容された。収容所は日本軍の三角兵舎（地上は三角の屋根だけ出し、下は地下になっている簡易兵舎）が利用された。上級将校は別のところに収容されたらしく、我々と同じに収容されたのは見習士官で終戦時に少尉になった者と隊長として大尉が一人であった。

毎日収容所の整備が主な作業で労働らしい労働は無く過ぎていく。その時こっそりと倉庫を覗くと、樽に入った塩鮭があった。ロスケの塩鮭は塩水で樽漬けにするので色がとても奇麗である。早速一本失敬して腹に巻いて、知らない顔して作業をしていたが、段々と腹が冷えてきてこれには困

った。余りに早い時期にやり過ぎてひと苦勞、でもどうやら隠し通して無事持ち帰り、皆で食べる。焼くと塩辛くて食べられない。生のままサシミにして食べると、とても美味しい。ロスケの魚は皆塩水で樽漬けし蓋をきっちりするのでちようど缶詰と同じで長期保存ができる。翌日も同じ所に行つたが今度は錠が掛つていて駄目だった。その代わりロスケの外套が一枚捨てゝあつたので、それを拾つて来た。自分は外套を持っていないのでちようど良かった。丈が長いので裾を切り、余つた布で靴下を作つた。これがまた暖かくて随分助かつた。自分がロスケの外套を着て歩くとロスケが見て皆笑つて、ヤポンスケハラシヨと聞くので、自分はハラシヨ、ハラシヨと答える。(ハラシヨとは良いと言う事)

マリンキドーム(日本では宮倉、ロスケでは監禁室)の前に見た事のある恰幅の良い、立派な髭をはやした年配の男が一人日向ぼっこをしてニコニコと見ている。歩哨に誰かと聞くと、この間ま

で大佐だったが何か悪い事して階級を剥奪されてマリンキドームに入れられたとの事らしい。ロスケの軍隊は出世も早いとされるのも早いようだ。

それにしても監視も着かず呑気な宮倉だ。

約一カ月位だろう、カレンダーも何も無いので日付も分からなくなっているが、多分十月の末頃だろう、いよいよ北海道に帰すとの事で出発準備をする。列車が無いのでまた真岡まで歩くと言う。日本に帰れるのであれば少し位歩くのは何でも無い。

途中我々が戦闘をやつた熊笹峠を越える。この山の中に沢山の戦友が眠っている。それを置いて自分達だけが帰るのは何と無く後ろめたい思いを感じるが、心の内でさようならと別れをつける。

夕方近く真岡に入り小学校が宿舎になっていた。真岡市民の方々が何かと世話をしてくれ、食事の準備もしてくれたようであるが、話ができないので状況は何も分からない。

翌日出発に際し市民からの贈り物として二人二枚ずつの餅を配られた。自分達が先に帰るのに何となく申し訳がないような気持ちだ。埠頭に向かい行進する。両側に市民が涙を浮かべて見送ってくれる。我々は一生懸命手を振りながら行進する。

輸送船

乗船したのは約一千人位だろう。ところが乗船が終わったら、命令あるまで甲板に出るなど指示された。何だか感じが変わる。やがて船が動き出したのが気配で分かる。夜半近くなつてようやくもう出ても良いと言うので急いで甲板に出て見る。空は晴れているが月は無く真つ暗である。どつちに向かっているのか分からない。しかし夜空を見上げると、これはいかに、船は北極星に向かって走っているではないか。北海道に行くなら北極は後ろでなければならぬ。これは北に向かつて進んでいるので変だとみんな騒ぎ始めた。騒ぎが段々と大きくなり、ロスケも気付き、通訳を通

じてこれは北の方にソ連の司令部が有りそこで命令を貰い、それから北海道に行くのだと説明される。何となく変な話であるが一応みんな納得する。翌日午前、北樺太のソ連本土との間が一番狭いところで、ちょうど大きな川のようなところで本土側の栈橋に船は着いた。海は浅く水が奇麗なので海底まで良く見える。風が物凄く寒く、身を切るようだ。本土側の小高い丘の上に沢山の天幕があり、既に日本軍の捕虜が沢山居る様子である。こんな寒いところで降ろされたら適わないと思ったが、降ろす気配は無いようである。

ロスケの将校が帰船して来て、間もなく船は栈橋を離れた。今度は南に向けて走り始めた。やっぱりロスケの言った事は本当だったのだと皆安心する。風が冷たいので船倉に降りる。船は貨物船で船倉を何段にも仕切って垂直の梯子で昇り降りする。食事は炊事班を出して大きな釜に蒸気をホースで直接入れる仕掛けで、皆半煮えのひどいものである。

ソ連船は上級船員の奥さんや小学校前の子供まで一緒に乗っているらしい。奥さんは奥さんで仕事も有るようだ。北の港を出て二日たった。甲板に出てみると、何とまだ進行方向の右側に陸地が見えているではないか、これは変だ、北海道に行くならもう陸地が見えないはずだ。これは北海道に行くのでなく、ソ連のウラジオストックに向かっているのではないか、段々と皆騒ぎ出してきた。

船には一千人近くいるから、こんな船を操縦できる船員の経験者もいるはずだ。警備兵は三十人位しかいないのだから、船を分捕って北海道へ逃げようか、「しかしソ連側は船の位置を常に無線で連絡を取っているはずだし、ソ連の潜水艦も近くにいるかも知れない、もし逃げたと分かれば撃沈される恐れもあるのではないか」「いやソ連の船員や警備兵も乗っているから攻撃はしないのではないか」議論百出、無理は止めようと言う事で結局諦めた。

三日後船はウラジオ近くと思われる沖合に停泊

する。辺りには船が沢山停泊している。

翌日船はまた動きだす。しばらくして入江のようなところを奥へ入って行く。港のようだ、ソ連の潜水艦が沢山いる。潜水艦が皆万国旗を掲げている。我々を歓迎しているのかと思ったが、そんな馬鹿な事は無い。(後で聞いたところ今日が十一月七日ソ連の革命記念日との事であった)。

シベリア上陸

くしくも革命記念日が我々のシベリア上陸の記念日になる。

船は岸壁に着き上陸が始まる。余り大きな町でない淋しい港だ。港を囲む山には高射砲陣地があるのが見える、こゝは軍港かもしれない、上陸が終わり行進が始まった。行つた先は何と海岸の砂浜である。

今日はこゝで泊まると言うのだ、町には宿舎の設備が無いらしい、砂浜なら何千人でも寝れるだろう。だが冗談じゃ無い。夏なら兎も角も、今は

冬である、何も無い。海岸の砂浜に寝ると言うのだ。

この砂浜には既に先客がいて、もう何日もいると言う、仕方ない諦めよう。夕食の支給が有ったが何と米だけだ、どうしようも無い。先客の兵隊が盛んに砂を掘っている。行つて見ると、何と三十センチ掘ると下に石炭があるのだ。ソレと我々も一生懸命に掘る、一センチ位の厚さで粉炭や小さな石炭が出て来た。皆でやったら結構集まった、石炭船が沈没か何かして流れて来たのだらう、誠に天の助けである。

石を集めて竈かまどを作り石炭を燃やして暖を取る、米は水を探して来て飯盒で炊き、どうやら夕食に有り付ける。砂の上に毛布を敷き皆で固まって寝る、ところが夜半になって雪が降つて来た。これはたまらん、とても寝て居られない、近くを探したらちようど良い大きさの鉄の枠みたいな物が有った、皆でそれを運んで来た。上に毛布を掛けて周囲も毛布で囲い何とか十人位入れる小屋になつ

た。真ん中に石炭竈を作り石炭を焚き暖を取る。毛布は小屋に使つたので着る毛布は無いが何とか寒さは凌げる。

翌朝起きて皆の顔を見て思わず笑つてしまった、石炭の煙りで真つ黒なのだ。煙突なしで石炭を焚いたので毛布も顔も真つ黒になつたのだ、海水で顔を洗う。何日目だらう、夕方銃声が一発聞こえた。しばらくして日本兵が一人撃たれたとの事、薪を探しに行つたのを逃亡と間違えられたらしい。言葉が通じないので間違いを起こす、絶対に単独行動をしない事だ。

奥地から毎日のように長い貨物列車が着いた。中には囚人が乗っている、皆ソ連人ばかりだ、どうも政治犯らしく終身刑で我々の乗つて来た船でカチャカへ送られるらしい。警備は我々に対する以上に厳しく嚴重である。貨車の窓には全部鉄格子が入っていて、用を足すだけわずかに扉を開けるのである。今後我々もあのような扱いを受けるのだらうか、上陸した時に将校の軍刀も皆取り上

げられた。どうもソ連は我々を終始だまして来たようだ、北海道へ返す振りをしないと暴動が起きる恐れがあるからだろう。簡単にだまされる自分達も悪いのだろう、しかし未経験の事であり、致し方ないだろう。

ロスケの子供達が柵のところまで来て、大きなパンを抱えて盛んにカランダス、カランダスと叫んでいる（カランダスは日本語で鉛筆）、パンと鉛筆を交換しようと言うのだ。子供達は鉛筆すら不自由しているらしい。しかし残念ながら小さな鉛筆一本すら誰も持っていない。

この砂浜に十日位いただろうか、こゝはナホトカと言う港町らしい。明日列車が来るので出発するらしいとの話が伝わって来た。

翌日の午後列車が来た、見ると貨物列車でなく客車である。ロスケの囚人と違う扱いにまた吃驚、列車に乗り込み終了と同時に発車する。

少し走るともう一面雪野原だ。客車で待遇が良くと思ったのは間違いで、おんぼろ貨車で窓ガラ

スが所々割れて無いので列車が走ると、シベリアの風がまともに吹き込み物凄い寒さになる。これなら貨物列車の方がよかった。

途中時々小さな駅で止まる、夜間になると警戒が厳しくなる、逃亡を心配しているのだ。しかし西も東も分からない我々が逃げようなんて考える者は一人もいないが、ロスケには通じない。

どこから乗って来たのか、十歳位の男の子が一人列車に乗っているのが見つかり、ロスケの将校が怒り降りると言う、しかし列車は走っているのに降りられる訳がない。ところが将校は無理やり列車から突き落としてしまった。随分と残酷な事をするものだ、我々は子供がどうなったか心配で眠れないくらいだ。雪があるので或いは助かっているかも知れないが、この夜中に人家の無いところだったら寒さで命の程は分からない。

出発三日目、目的地に着いた、イマンという町である、どの程度の町か分からない。こゝが終着かと思ったら、またこゝから歩いて百キロ先の収

容所に行くとの事、また行軍が始まる。十一月であるが既に一面の雪野原で雪は余り深くなく、かちかちに凍っていてどこでも歩ける状態である、最初の宿泊は小さな村の学校の教室であった、炊事は直ぐ準備にかかる。

夜でも暖房は無い、みんな石炭の煤で真っ黒になった毛布だけが頼りだ。翌日も行軍は続く、一日二十キロ位の行程なので五日間の予定のようだ。二日目の夜は農家の納屋のようなところに入れられた。狭いので立ったままびっしり詰め込まれた。一晩中立つてもいられないので段々と腰を降ろす。その為に益々身動きができず足も延ばせない。まして小便をしたくても外へも出られない、こんな酷い夜は初めてだ。しかし狭いところにびっしりなので寒さだけは凌げる。朝まだ暗い内から皆我慢できなくて外に出る。二日目・三日目は別段変わった事もなく、五日目どうやら目的の收容所に着いた、こゝも既に別の部隊がいた。自分達は二十人程と一緒に小さな一室だけの棟に入る、三日

程いたが、今度は一ケ中隊二百人位が別のところへ行く事になり、自分達の隊が行く事になった。

新收容所

こゝは前の收容所から歩いて一日行程のところ、大きな建物が一棟とロスケの住宅が少しあるだけで柵も何も無い山の中である。こゝに新しい收容所を造るのでその要員として来たらしい。完成すると、また二千人位が收容されるらしい。

後ろには小さな小川があり、山の中なので水はとても奇麗だ。辺りは小高い山に囲まれて、一面の森林であり従って余り風が無いのが幸いである。ソ連側の收容所所長はドイツとの戦いで負傷した傷痍軍人のK中尉二十一歳で、東洋系の顔をした美男子で独身、誠に気立ての優しい人である。その下に将校が三人、下士官以下兵が十人で、收容所と警備を兼ねている。大変人の良い所長である為その部下もまた皆良い人ばかりだ。

労働時間は一日八時間、朝八時から夕方五時ま

でが作業時間で日曜日は休みである。宿舎は二室あり、壁側にぐるっと二段造りの寝台兼居間になり、座つても頭が支えない高さがある。

真ん中に鉄製の薪ストーブがあり、夜中も通して焚いている。

寝台の床板が製材した板でなく木材をナタで割つただけの物で凸凹で背中が痛くて眠れそうも無い代物だ。

一番困るのは灯りである。電気は勿論ランプもロウソクも何も無い。しかも冬は午後四時頃には暗くなる、従つて作業も終わって帰ってくる頃はもう真つ暗で食事をするのも暗い中でしなればならず一番困つた。飯盒のある者は良いが自分達のように戦闘をやつた者は飯盒も無いので缶詰の空き缶で食事をする。従つて、空き缶は貴重品なのである、ソ連では空き缶すら中々手に入らないのだ。

防寒具

防寒具が支給になった。防寒服上下、これは中に綿の入った物で結構暖かい、それと防寒靴、それはフェルトでできた物で、新しい物はフェルトを型で長靴に造つた物で靴底も全部フェルトである、軽くてとても暖かい物だ。雪がサラサラしているので濡れる事がない。捕虜にはそんな立派な物でなく、底の破れた古いものを底に別のフェルトを縫い付けた物、それでも充分暖かい。

ソ連は軍隊も靴下は使用せず、夏は綿・冬はネルの四角の布を足にぐるぐる巻いて靴を履く。ぐるぐる巻くので靴下を二枚も三枚も履いたのと同じだ。それに四角の布なので同じところを履かないのでなかなか破れない。

捕虜にも同じ物が支給されたが初めのうちは中々うまく巻けない。少し歩いただけで解けてしまふ。だが段々と上手になった。外に出る時はシユーパー（毛皮の外套）の古い物が支給された、これも本当に暖かい。防寒帽は日本軍の物が支給

になった。

ロシア語

自分は捕虜になった時絶対にロシア語等覚えて帰らないと思っていたがシベリアに渡りいつ帰れるか解からない今、考えてみるとロシア語が分からないと意思の疎通が充分できずに損をすることが多いことに気づき、一生懸命に覚えることにする。

ロスケという言葉は悪い言葉だと思っていたが、実はロスケはロシア人という事で日本人はヤポンスケ、中国人はキタイスケ、朝鮮人はカレーケ、アメリカはアメリカンスケ、と言う。スケあるいはスキと言うのは「人」という意味だった。

灯り

灯りもしばらくするうちに毎晩宿舎の前に止めてあるトラックがジーゼルエンジンで石油を使っていることが分かり、夜こっそり針金の先にボロ

切れを付けて燃料タンクに突っ込み、それを絞るという方法で盗むのである。空き缶には芯をつけてランプにした。

お陰で食事の時だけでも明かりが取れて大変助かった。

各班共真似をしたのでトラックの燃料は半分使われた事と思うが、ロスケも知らない訳はないと思うが、何も言わなかった。

点呼

朝夕二回必ず全員点呼がある。寒い屋外に並ばされ、数えるのに三十分も四十分もかかるのである。二百人位の人数を数えるのに一度では数えられない。しかも五列に並ばなければ数えられない。将校でも掛け算ができない。全部足し算で数える。

日本の当番下士官がソロバンで一度で数えても信用しない、そんな物で分かる話がないと言う。だから二回・三回と数え直す。中に一人ひょうきんな少尉が居て、彼の日直当番の時は目だけです

ーと数えて一回でハラシヨ（良い）と言って終わる。だが本当は何も分かかっていない、ただ良い振りをしているだけ。ソ連では義務教育は小学校四年制であるが殆ど読み書き計算ができない。日本兵は全員読み書きができるので驚いている。日本人は皆インテリだと言う。特に眼鏡をかけているのは絶対インテリだと評判が良い。

作業に行く時帰る時、歩哨が必ず点呼を取る、それがどんな狭いところでも五列に並ばされる。

虱（しらみ）

朝暗いうちに出て夜は暗くなってから帰るので、部屋の中は真つ暗で、ランプは石油が少ないので食事の時しか使えず、虱取りができない。歯も磨かず、風呂にも入らず、寝る時は着たままでしかも狭いので皆身体を寄せ合って寝るので、自然発生的に虱が蔓延する。一匹・二匹のうちは痒みも分かるが全身にびっしりいると、もう神経も麻痺して痒みも分からなくなる。たまにごそごそ這い

回る奴だけ手探りで捕まえるだけ、日曜日はもっぱら虱取りが仕事だ。虱にも沢山の種類があるのがわかった。シャツの縫い目にはびっしりと卵が団子になってついている。もう一つの発見は虱は飼い主が変わると、二・三日血を吸えないらしく、身体が白くなっている。これはお前のだから返すよと冗談も出る。

毛布には虱が付かないと聞いていたが、これだけいると住家がないとみえて毛布にもいっぱい居る。いくら取っても取り切れない。一週間たつと元の木阿弥だ。ただでさえ栄養が足りない捕虜にこれだけ血を吸われては栄養失調になるばかり、中には虱を仇と思つてか逆に食べている奴もいてこれには自分も参った。

食事

食事は日本軍の貯蔵米（粃のまま）を持って来たたらしく、粃のまま支給されるので、臼を作り足踏み式の杵でつく、粃殻も取れると同時に精白も

される。だが中には初のままの物も少し入っている、これを五分粥以上に延ばした物が支給される。昼の弁当も同じ、副食は塩魚と芋、豆、野菜等の煮付けが少し、だが朝と昼の分を一度に食べても腹いっぱいにならない。結局は昼は塩魚に雪を入れて煮て、塩魚のスープを飲むだけ。夕食は黒パンが一人三〇〇グラム位と時々肉の入った煮付けのような物が出る。黒パンは少し酸っぱいので初めは「ロスケの奴、捕虜を馬鹿にして、腐ったパンを食わすのだ」と思ったが、そうではなく、酸っぱい味のイースト菌を使っているので腐った訳ではない。

ロスケの兵隊も同じ物を食べているらしい。パンが黒いのは粉にフスマが入っている事と漂白していない為だ。馴れると酸っぱい味が美味しく感じるようになった。

黒パン一個は三キロあるので十人で十個に分けるとちょうど良いのであるが、これが大変。パンの形が四角でなくつぶれたり曲がったりで平均に

分けるのが大変面倒なのである。食事当番が分けるのだが、皆がその回りをぐるりと取り囲み睨んでいる。

まず最初に物差しで計って大体平均にして、今度は天秤てんびんで計り目方を同じにする。それでもまだ納得できず、今度は番号札で籤引きし、当たった番号順に左から取っていく。それでやっと納得するのである、それが毎日の行事でまた楽しいことでもある。

時々炊事からだしを取った後の骨が支給になる、骨を割ると中に髄がありそれを皆に食べさせて少しでも栄養の足しにするためだ。だが自分は何となく食べられなくて食べた事がないので味は分からないが美味しいとの話だった。

ある日、他の班の兵隊であるが、腹が痛いと言ひ出した。日本軍の軍医が居るので、診察して貰ったところ、糞詰まりだとの事。浣腸をかけたところ出て来た物は何と細かく砕いた骨ばかり、出る出るわ、吃驚する程出た。魚の小骨と違い

動物の骨は消化しないのだ。彼は虱も食べていた兵だが美唄出身の体格の良い男なので人一倍腹が空くのだろう、危なく命を落とすところであった。

食事に糲が入っているので盲腸を心配したが、糲はある程度大きいので心配する程のこともなく、誰も盲腸にはならなかった。

作業

収容所の作業は外柵作りや、他の地区にある大きな建物を解体して、それをトラクターで運び収容所内に組み立てて宿舎にする作業が大半である。相当大きな建物なので難作業である、しかも何をすることも満足な道具がないのである。

ある日、誰かトラクターの運転ができる者はいないかと言うので、トラクターの運転なら身体も楽だしあんな物スピードもないし、一回教えて貰えばできると思えば自分ができると思えば言った。

「よしそれなら明日からトラクターの助手をやらせ」と命じられた。しめたとと思ったのが大変な誤

りであった。こゝは夜中には零下三〇度は軽く越す。そのためにトラクターのエンジンが凍ってかからなくなるので、一晚中エンジンの下で薪を燃やして暖めるのが仕事だ、トラクターの運転とは関係ない。皆が寝ている夜中じゅう起きて火を焚いていなければならぬ。身体は楽で火の側なので寒くはないが、どうしても眠くなる。話が違うと言っても後の祭り、それでも二日間やった、誰かやらないかと聞いたら、やると言う者がおり、早速代わってもらった。

こゝでは日中で零下三〇度を越すと作業中止になる。

お正月

ソ連もお正月は一日だけ休みになった。二百人もいると百人一首も一首も残らず全部書く者もいる。板も削り札を作って故郷を忍んでカルタ大会をやる。外に何も娯楽がないので大変楽しい。ロシアの将校が見に来て仲間に入れると言う。句を

読むと何も分からないのに、ハイと言って前の札を飛ばす、それが面白くて皆大笑い。

炊事班も毎日の材料を少しずつ節約して蓄えた食料で尾頭つき（鯿）、きんとん、煮付け等五・六品のご馳走を作ってくれた、大変な努力だと思う。久しぶりに満腹感を味わった、良いお正月であった。

カルタはその後毎日毎に楽しんだ。

風呂

少し離れた小川の縁に小さな風呂場ができた、ロシア式風呂は浴槽はなく、部屋の中に五段位の段を作り、下の方で鉄製のストーブを焚き、そのストーブにバケツで何杯も水をかけ蒸気を生みさせて蒸し風呂にする。

上の段にゆく程熱くなる、自分の好きな熱さの段に腰掛ける。

しばらく我慢していると、どんどん汗が出てくる、垢も浮いてくる。結構いい気分になる。

しかし石鹸も何もない、タオルもないのでどうにも仕様がなない。

ロスケに教えてもらったのは葉っぱの付いた木の枝に水を付けてそれで背中をパンパンと叩く、そうすると浮いた垢が自然に取れるということをやってみる。結構垢は取れる。何カ月も風呂どころか顔も洗っていないので全身から取っても取ってもどんどん出てくる。本当に何カ月ぶりの風呂だろう、生き返った気分だ。

だが二百人もいるのでそう度々入ることができない。

自分も一回だけ風呂当番に行った。前の小川から水を汲み、お湯を沸かしたり、ストーブを焚いて暖めたりが仕事であるが、小川が殆ど川底まで凍っていて、下の方にほんの少しチョロチョロ流れているだけ、しかも穴は相当深くなかなか大変である。だが悪いことばかりでない、それはその穴の明かりに釣られてかザリガニが出てくるのだ。獲っても、獲っても次々と出てくる。水を汲みな

がら二十四匹程も獲れた。これをストーブの上で焼くと皮ごと食べられる、とても美味しかった、これが本当の役得だ。

当番でもロスケの奥さんが入る時は追い出される。意識的にしたのではないのにロスケの女性の方を向いて小便をしたとして、マーリンキドーム（営倉）に入れられた者も居る位エチケットもうるさい国だ。

虱退治

ロスケも虱がいるとみえて、虱退治の方法を知っている。その方法は小さな小屋を作り、内外から泥壁を塗り密閉する、天井に衣服を吊るし下からどンドンストーブを焚くのである、そうすると、虱は熱いので慌てて走り回りそのうちに足を滑らせて下に落ちるといふ仕掛けだ。卵も熱で乾燥して全滅する。

自分は虱ドームの中が暖かいのでこっそりさぼって中で居眠りしていたが、しばらくして首の辺

りがごそごそするので手をやってみたらなんと大きな虱である。吃驚して下を見るとなんと全身に虱が這い上がって来ている。思わず飛び出して服を脱いで払った。虱は下に落ちただけで死んではいなかったのだ、さぼった罰で笑い話にもならない。

伐採

試験伐採をやるという事で自分の分隊がやる事になった。ロスケの鋸（ピラ）二人挽きで押して切る。二人で押したり引いたり呼吸が合わないと疲れるだけで切れない、鋸係が二人、枝を払うナタ（タポール）係が一人計三人一組で三平方メートル、三組で九平方メートルを切るとノルマー〇〇%になる、これは割合と楽なノルマである。

ロスケの将校が一人、指導のため一緒に来て色々教えてくれる。この山は誠に立派な森林で、五葉の松がびっしりと生えている。密生に近いので曲がらず真っ直ぐ伸びている。早速作業に

入る、馴れないのでなかなか呼吸が合わない。力ばかり入ってすぐ疲れてしまう、だがやっているうちに段々上手になった。

三人で手頃なのを三本倒すと大体間に合う、それを枝を払って四メートルの長さに玉切りする、払った枝は全部焼いてしまう、そのままにしておくとか害虫が付くからとの事。この枝焼きがまた大変助かる。零下一五度から二〇度もある中でこの焚火は大きな火になり、昼の休憩時間には裸になつて虱取りができるのだ。

シャツを脱いで火にあぶると、虱は熱いので走り回る、そこをすかさず払い落とす。一匹一匹取るより効率的なので皆これをやる。それでも午後四時頃までにノルマー一〇〇%を達成したのでロスケの将校も大変満足のようなだった。

一週間程この試験伐採に参加してだいぶん要領も良くなった。また伐採のもう一つの楽しみは、キノコだ。シベリアの秋は急速に寒くなるとみえて秋遅くに出たキノコが凍って自然乾燥の状態で

木に付いている。これを取って塩魚と一緒に煮るととても美味しいのである。昼の弁当代わりになりとても助かった。

床屋

収容所には床屋さんがいないので捕虜は皆髪の毛がぼうぼうに伸びて段々人相が悪くなる。元々悪いのもいるが、ちようど自分は良く切れる洋鋏を一丁持っていたのである日曜日に戦友の頭を裾刈りしているところをロスケの兵隊が見つけて、自分達の頭もやってくれと言うので、ロスケの兵舎に行つて兵隊の頭を裾刈りしてやる、次から次と五人もやった。兵隊達は喜んで食事を出して食べて行けと言う。外の者に悪いから持つて行かずにこゝでうんと食べて行けと言う。久しぶりの固いご飯で油で味付けがしてあり、物凄く美味しい。外に肉とか豆の煮付けも出た、働かざる者は食うべからずで、その代わり働くと必ず報酬を出すのがロスケの習慣なのだ。自分は一生懸命に食べた、

腹がいっぱいになっても口が飽きないのだ。喉までつかえてもまだ食べたい。ロスケは喉につかえるまで食べたと笑う。次からクシクシドククトルというあだ名がついた（良く食べる床屋と言うことらしい）。それから時々床屋と呼ばれ、その都度ご馳走になったので大変助かった。春、本隊が来るまで続いたが、本隊が来たら、本職の床屋がいて自分の仕事はなくなった。

コックリさん

自分は初めてで知らなかったのであるが、コックリさんと言って狐を呼んで、占いをするのだ、他の隊でそれをやる者がいて占ったところ、五月頃に帰れるという占いが出たと、その話で持ちきりになった。それでは我々も一つ占ってもらおうと言う事になり、黒パンや魚を無理して残してその兵隊を呼んだ。

どうするのかというと、大きな紙に鳥居を書いて、いろは四十八文字と一から十までの数字を書

いたものを前に置き、本人は目隠しをして箸のよな物を両手で握り、紙の上に置く、窓を開けて狐が入れるようにして一心に念ずるのだ。すると嘘か本当か知らないが手が段々震えてきて、トンと紙の上を突つつかるのである。その突つつかところの字を辿っていくと一つの文章になる。果たして日本の狐が遙々とこんなシベリアまで来るとは思われないが、皆真剣である。

こんな事を信じる程望郷の思いが強いのだ。この時ははっきりとした文章にはならず終わつた。自分のように信用しない者がいたので、狐が怒つたのかも知れない、どうぞお狐様お帰り下さい、と本人が言って終わった。

本当に狐に化かされたようなものでお供えだけはっきり持っていかれた。その後も時々コックリさんがああ言った、こう言ったと話が伝わってきたが、どの話も当たらないので段々信用しなくなつていつの間にかこっくりさんの話はなくなつた。

パン工場

収容所で使うパンは付属の小さなパン工場でロスケのお婆さん一人と日本兵二人の三人で作っている。

まず釜に薪を入れてどンドン燃やして釜を焼き、熱くなったところで火を全部出して、発酵させた原料を鉄の箱に入れて、焼けた釜の中に入れて蓋をする。三十分位でできあがる。

ある日、長江という兵隊がこのパン工場から、パンを盗んだのをロスケに見つかってしまった。

所長がカンカンになって怒った。あのおとなしい所長がこんな怒ったのは初めて見た。所長は「腹のすくのはお前だけではない、皆同じだ。それをみんなのパンを盗んで、自分一人だけ腹いっぱい食べるなど、もつての外、銃殺にする。向こうに行つて立て」と言つて、腰から拳銃を抜き弾を込めた。長江は真っ青になったが言われるままに五メートル程離れたところに立った。自分達もこれはやられると思つた。本人はもう覚悟を決め

たようである。所長は静かに拳銃を上げて狙いを付けた。その時間は僅かであつたろうが、我々にはとても長く感じられた。

ところが所長が突然狙いを外して言つた言葉は「お前はそんなに腹が減つたか」と言つたのだ。

長江は「ハイ」と返事をした。「ヨシ分かつた、お前は明日からパン工場の仕事をやれ」と命じた。本当に良かった。そのお陰で彼は一カ月後には丸々と太つてしまつた。本当に運の良い奴である。それにしても誠に立派な所長であり、感心させられた。

得な名前

名前で得をした兵隊もいた。その兵は初年兵で丸顔の可愛い顔をした兵であるが、名前が「海老」という。ところがこの「エビ」と言うのはロシア語では親と姦すると言う事になる。

ロシア語で一番汚い言葉が「エビヨツポイノマリチ」と言う、要するに「親とする馬鹿野郎」と

言う事である。海老と呼ぶとロスケが皆笑うので初め何の事か分からなかったが、彼は一躍有名になり、とうとうロスケの将校の官舎当番を命じられ、毎日雑用をするだけ。食事も充分で帰るまで楽をした組である。

本格作業に入る

三月末頃までに宿舎も全部完成して四月に他の部隊が入所して人員が一遍に一千人程になった。いよいよ本格的な伐採作業が始まる。

ソ連側の警備隊も増強され、警備は警備だけの別の隊になり、收容所側の隊とは命令系統も別となり、少し厳しくなった。

自分も伐採作業に行く、山は中隊ごとに別の山に入る。伐採の監督に来るのが民間人で、しかも十七・八歳位の女の子なのだ。これがなかなか融通が効かない、また警備兵は警備兵で自分達の監視がし易いように、できるだけ作業区域を小さくし、四方を切り開いて見通しを良くし、その内側

で作業をやれと言う。ところが狭いと木を倒すと危険が多くて能率が上がらない。殆どが素人なので、この木はどっちに倒れるか解らないで切るので時々自分の意志に反して反対側に倒れて来るので、うっかりしてられない。それで監督と警備兵が毎朝喧嘩をしていて、なかなか作業区域が決まらない。馴れた者は枝の張り方でどっちに倒れるか分かる。また倒した後の作業がし易い場所に楔を使って自由に倒す事ができる。しかし素人はそうはいかない、時々倒そうと思う反対の方へ倒れるがその場合倒そうとする方向には声をかけるが反対の方には注意をしないので事故を起こすある日、「危ない」、の聲がしたので上を見ると大木が自分の方へ向かって倒れてくる。慌てて逃げようとしたら運悪くツンドラ坊主に足を取られて転んでしまった。もう逃げる時間がない、頭を抱えて伏せる。シューと大きな音を立てて倒れて来る。時間にしてほんの二、三秒だろうがとても長く感じる。ドンと大きな音がして枝が折れて舞い

上がる。ところが自分の身体はちょうど太い枝と枝の間にあり、小枝で少し背中を怪我しただけで助かったが、もう一メートルずれていたら天国の切符を貰うところだった。皆はもう駄目だと思っただろう。枝を掻き分け顔を出したら、皆わっと声を上げて喜んだ。

自分は本当に運が強いと思った、戦場であれだけ弾が来ても全く当たらず、今もまた僅かの差で命を拾った。生と死は紙一重と言うが全くその通りだと思った。

今回も素人が楔で倒そうとして失敗した典型的な過ちだった。

シベリアの春

春になりすっかり雪がなくなり、若草が新芽を出し始めた。春になって一番困ったのは、靴の支給がないことだ。ロスケは木の皮でつまごのような物を作る方法を講習してくれたが、固いので靴下もない素足では痛くて履けたものではない。仕

方がないので枯れ草で草鞋を作って履く、藁と違い弱いので毎日一足ずつ作らないと間に合わない。

また春になって雪が消えると、この山奥までの道路がない、ツンドラ地帯が多くてトラックもトラクターも通れないのである。一番近い村でも二十キロ以上も離れている、食料等はその村までしか来ないので、そこからは人力で運ばなければならぬ、この運搬の使役が一番こたえる。何しろ一人三十キロくらいの荷を担いで、道らしい道もないところを運ぶのだが、栄養失調の身体では大変な重労働である。だが運ばなければなお栄養失調になる。歩きながらこんな苦勞をするくらいなら死んだ方がよっぽど楽だと考えながら、ただ情性で足を前に出している。

でも春になって悪い事ばかりでもない。春になり新芽が出て来たので作業に行く途中で食べられるような野草を採りながら行く。作業場に着くまでに昼食分位は楽に採れる。それを塩魚と一緒に煮て昼食にするので、空腹を十分に満たしてくれる

のである。その他に自分はどうしても食べられなかったが、蛙、蛇、かたつむり等を食べていた。ロスケの兵隊は蛇が大嫌いで、蛇を見ると悲鳴を上げて飛んで逃げる。それを日本兵は平気で食べるので気持ち悪がつて寄り付かない。また馬の食べている物は全部大丈夫と言って食べている物を良く観察する。

それで日本兵は塩さえあれば死なないので塩を持ってしていると逃亡すると言って、時々検査をして塩を取り上げる。

作業ノルマ

所長がある朝の点呼の時、通訳を通して「みんなに話したい事がある、それはこのイマン地区に十一カ所の収容所があり、所長会議があり行ってきたが、十一の収容所所長の中で自分が一番歳が若く、階級も一番下であり、また収容所の成績も一番悪いのである。従って皆のために少しでも食料を貰って来たいのだが貰えない。自分の力が足

りないと思うが、皆も、もう少し能率を上げて貰いたい」と涙を浮かべて話をされた。

皆は所長の話に感激して、それでは少し馬力を掛けてやるかという事で、その日はいつもよりも三十%位能率が上がった。所長は喜んで「今日は良い成績だった、これは少ないが自分用の漬物だが、皆で少しずつ食べてほしい」と二樽を持って来てくれた、これまた感激である。だがいかんせん栄養失調の身体では、所長の気持ちは分かるが、その成績は一週間位しか続かなかった。

故郷への手紙

ソ連側からハガキを一枚ずつ渡され国へ手紙を書けと言われた、文字は全部カナで書けと言う。自分はそのようなものは書かない、ロスケは嘘ばかり言うので信用できない。そんな物書かせて思想調査にでも使うのだろう、書かないと頑張っていたところ、ロスケの将校が来て「これは絶対に国に送るので間違いない着く、国際法で定められてい

「るのだから」と言う。仕方なくそれでは書く、と簡単に元気でいるからとだけ書いた。本当に着くとは思っていなかった。

(ところが後日復員してから聞いたところそのハガキが着いていたのだ。母は私の事が心配で神様に見て貰ったら、もう死んでいる、持っていた服を欲しがっているので、供えなさいと言われて、自分の服を全部供えて来たところだった。その直後にハガキが着いたので慌てて取り返して来たそうである。ロスケより神様の方が嘘を言うらしい、ロスケを疑って申し訳ないと思っている)

大工の棟梁

ある朝、作業割り当ての時「誰か大工のできる者はいないか」と言うので、自分ができると申し入れる。

自分は樺太でも倉庫を建てて来たので自信がある。「ヨシ、それじゃあお前行け、ロスケの民間の監督がいるからその指示を受けろ」と命令を受け

る。

ロスケの監督の話では前の大工は駄目だ、頭が悪いと言うのである。どうしたのかと他の者に聞くと、丸太を一本計り違えて切り損じたとの事である。ロスケの家は原木のまま積み上げていく方法であるが、住宅を建てている付近には木がなく、春になると運ぶ手段がないので、一本でも駄目にすると大変なのだ、それで怒って首にしたらしい。

しかし原木を積むので一本一本寸法と太さを合わせて切り込みを入れるのでそんなに難しいものでない。早速仕事にかかる、自分の他に手元が三人いるので、自分は寸法を計り墨付けをし、他の者が切り込みをする。一本積んではまた次をやるので間違える筈がないのだが、本職の大工が何で間違えたのか。

その大工と言うのが例の糞詰まりをやった男だと分かって、さもありませんと納得した。

順調に作業が進むので監督も満足して煙草をくれる。すっかり信用が付いて今日から大工の棟梁

になった。

この建物はロスケの個人住宅との事である。大工ができると嘘を言ったが実際は全くの素人で不安はあるが、そこは持ち前の心臓で図面を見ながら何とか上まで積み上げた。天井は一吋板を張りその上に三十センチ程土を載せる。これは寒気を防ぐのと雨が漏っても土に吸収されて下に落ちない仕掛けだ。従って屋根は簡単に割り板を張るだけで三角の部分は両方共空けたまま、風通しを良くしておく。

建物が出来上がったなら、今度は入口のドアと窓枠も作れと言う。ロスケの住宅の窓枠は日本と違い、ガラスの寸法が一枚一枚違うので棧を通し棧にできない誠に複雑な作りなのだ。しかも道具が何もない。仕方ないので鍛冶屋の担当に頼んで、ノミと鉋の刃を作って貰い、鉋の台は自分で作った。

本部に頼んで本職の指し物師がいなか探して貰ったところ、やはり一千人もいると色々な職業

の者が居るもので、本職がいたのである。早速翌日から彼を使って作り始める。結構立派な物ができた。終わると今度は机や椅子も作れと言う。ロスケは大工は木に関する物は何でもできると思っている。しかし今度は本職がいるので大丈夫、これも希望通りの物を作り上げた。

自分で大工を引き受けてから約一カ月位ですべて立派にできあがり、監督も大変満足してくれた。それで終わりと思っていたら、監督がまた大きな図面を持ってきて、今度はこれを作ると言う。見ると大きな建物でトラクターが三台入るガレージだとの事。幅六メートル長さ二十メートルの大きな物である。自分にはできないと断ったが、すっかり監督に見込まれ、どうしてもやれと言う。やらないとマーリンキドームに入れると脅かす。仕方ないのでやる事にし、とうとう本職の大工になった。

土台には大木が必要なので、木のあるところで建てる事になり、少し離れたところで始まった。

十五人の手元を貰い、作業に入る。まず土台になる木を倒し、穴を掘って土台を入れるのであるが、これが問題だ。根元と先では太さが大分違い、一旦入れると大木なので動かす事ができない。どうやって上を水平に入れるか悩んだ。ところが幸いな事にツンドラ地帯なので掘った穴に水が溜まっている。しめた！ 水は水平なので水面を基準にして深さを割り出し掘らせた。その通り一発で決まったので監督も感心する。この建物は柱を建て、柱に溝を掘り細い丸太をその溝に落として壁を作る方法で従来のソ連式の建物と違い日本式に近い方法だ。

監督は柱を丸いまま建てるのだと言う、自分はそのでは駄目だ丸太の両面を平らに削って上下同じ厚さにし、壁の丸太は全部同じ長さに切れば良く、その方が能率も上がり楽だ。また土台も柱を建てる所を平らに削った方が安定すると説明する。監督は素人なのか感心してそれで良いと全部任せしてくれた。これで少しやり易くなった。自

分は専ら掘るところ、削るところを墨付けする。墨付けの仕事がない時は自分も削る仕事をしていたら監督が来て「お前は仕事をするな、外の者が間違わないように見ていけば良い」と言う。大分柱もできてきた。だが自分は心配でなかなか立てる決心が付かない。監督は早く立てると言う、自分はまだ駄目だと言って立てない。

宿舎の中に修理をするところがあり、頼まれて一日ガレージの方を休んだ。

翌日行くと何と柱が立っているではないか、自分がいないのを幸いに監督が立てさせたのだ。監督は自分の顔を見てニヤニヤ笑っている、だが柱はちゃんと立っている、自分は監督にヨッポイノマーチと言ったが、心の内では安心していた。

それからはできた柱から順次立てた、梁も無事上がった。これで少しくらい風が吹いても大丈夫と一安心。

梁にロシア語で自分の名前を刻んでおいた。屋根や壁ができた頃、自分の歯茎が腫れて、痛くて

作業に行けず、医務室に日本の歯科の軍医が居るので診察を受けたところ「オーこれはよく腫れている、俺の患者が全然いない、お前はお客さんだ、ゆっくり休ませてやるから入室せよ」と言って入室させてくれる。ところが軍医の方が早く治ってはせっかくなのお客さんがいなくなるので、薬は勿論、治療もしてくれない。医者にはノルマはないのだが、やはり患者がなくて遊んでいるのは気が引けるのだろう、休ませてくれるのは有り難いが痛いには参ってしまう。

何もしないで十日間も医務室に入室して、何も治療もしないで治ってしまった。

ガレージに行かず宿舎の修理をしていたら、監督が来て見つかった。「トジーマヒートラ（ずるい）、ボルノイニオト（病気でない）」と言って怒った。話では毎日見に来ていたらしい、明日からまたガレージに来いと怒って帰った。仕方ないのでまたガレージに行く。だがもう殆ど大工の仕事は終わり、後は内・外に泥壁を塗るだけになって

いた。二日程で自分の仕事は終了した。

監督がロスケ側に宣伝したと見えて、とても評判がよく信用された。

ゲペウ

ゲペウには二種類あり、ゲペウの制服を着た者と、全く一般の者と同じ服装の者があり、一般の服装の者はあらゆる階層の中におり、誰がゲペウか全く分からないようになっていた。ゲペウ同志もお互いに分からない。叱られるかも知れないがソ連の共産主義を支えているのは、この秘密警察があるからだと思う。政治批判は一切禁句で自分の女房にも政治批判はできないと言う。しかし収容所にゲペウが調査に来ると言うと、途端に待遇が良くなる。その点ゲペウは捕虜に対しても平等に扱ってくれるらしい。

午前の仕事も終わり宿舎に帰ると、ロスケの本部で呼んでいると言うので行くと、別室に入れと言うので入ると、奇麗な制服を着たゲペウの将校

と通訳がいた。通訳を通して自分の名前、年齢、出身、両親の名前、兄弟の名前また故郷の友人の名前まで聞いて一生懸命書いている。

次は「天皇陛下は悪い人ですか、良い人ですか」と聞く。自分は何て言ったら良いか分からないので黙っていると、「天皇陛下は悪い人ですね」と勝手に書いている。また自分の顔を見ながら人相を書いているようだ。その次の質問が「この収容所に逃亡を計画している者がいる、その名前をお前は知っている筈だ、その名前を言え」と言う。自分はまったくの初耳でそんな事は知らない。「そんな事は知らない」と答えた。「西も東も分からないところから逃げようがない。そんな計画はない」と言うと、いやお前は知っている、知っているという証人がいる。どうしても言わないならその証人を連れて来るぞと脅かす。「いたら連れて来てくれ、なんでそんな事を言うのか自分も知りたい」と言った。

ゲペウは拳銃に弾を込めたり、抜いたりして

る。「どうしても言わないなら今日は宿舎に返さない、持ち物は誰かにもって来させる。そしてハバロフスクに連れて行き裁判にかける。もしそこで嘘が分かったらお前は銃殺になる」と言う。自分は覚悟を決めた、もし苦し紛れに誰かの名前を言えば、その者が酷い目に会うだろう。自分にはそんな事はできない。「裁判でも何でも、知らないものは知らない」と答える。「もしお前が嘘を言っている事が分かったら、国に帰ってからでも逮捕できる」と言う。そのために住所から親の名前まで聞いたのか、いま日本がどうなっているのか全く分からない。あるいは無条件降伏した日本だから、帰っても本当に逮捕できるのかと思った。しかし何と言われても知らないものは知らないと頑張る。段々と時間が経ち点呼の時間になったが返されない。食事も運んで来た、これは本当にハバロフスクに連れて行かれると諦めた。だがいるという証人は連れて来る気配はない。これはひよっとして山を掛けているのかも知れないと考えた。

八時頃だろうか、突然ゲペウがニコニコしてもう帰っても良いと言う。煙草を一箱くれて、この事は誰にも言うなと念を押して返してくれた。

自分の名前がロスケに知られ過ぎてソ連に対する協力者と間違われたのかも知れない、山を掛けたのだろう。

便所

収容所の便所は宿舎の横に大きな穴を掘り、高さ五〇センチ程の囲いを付けて屋根には割り板を張り、穴の上に細い丸太を渡し、皆が並んでするのである。初めのうちは何か具合が悪く、出るものでなかったがそれもすぐ馴れ、わいわい話しながらやっている。ところが冬のうちは良かったが、段々暖かくなつてくると匂いが酷くどうにもならない。それで今度は便槽を引き出し式にして二十カ所程並べて作り、当番が引き出しを担いで山に捨てて来るようにしたので少し良くなった。ただ困る事は紙がない事である。ロスケは紙を使わな

いらしく、一切紙の支給はない、仕方ないので着ている服の綿を少しずつ千切って使った。春になる頃ちようど上下の服の綿は全部なくなっていた、春以降は草木の葉で何とかなった。

ソ連の軍医

軍医は日本の内科と歯科の軍医が常時いるのであるが、定期的にソ連の軍医も巡回して来る。ソ連には女の軍医が多い、ところが女医の方が厳しい、時々衛生検査をし宿舎内を検査し、食器に使っている缶詰の缶等錆びていると全部引き上げて捨ててしまう。缶はどうしても隅のところ錆びる。食器がないので缶は貴重品で中々手に入らない物なのに、食器の支給もしないで一方的に取り上げる。固いご飯ならまだしも、スープに近い食事では缶がなければ食事もできない、捨てられたのをまた拾って来る。

ロスケの軍医が持っている聴診器はゴム管でなく、子供の玩具のブリキのラッパのように両端が

ラツパのようになった物を直接胸に当てて聴くので、何かマンガのようなユーモラスな格好である。

驚いたのは種痘である、やはり腕にするのだが、メスが無いのか、ペン先を研いだ物でするので、切れなくてとても痛い、嘘のような話。

ロスケの民間人はロスケの軍医より日本の軍医の方を信用していて、日本の軍医に見て欲しいと言って良く訪ねてくる。

チヨルカピリ

自分は建築の仕事が終わったのでチヨルカピリの作業に行く。チヨルカとはトラクターの燃料にする薪の事。ピリとは切るという事。要するにトラクターの燃料の薪切り、トラクターに薪を使うと言うのは初めて知ったが日本人も戦争中は自動車の燃料に木炭を使っていたが、ソ連では木炭がないので木を使う事を考えたようだ。まず堅い木を、檜、タモ、柏、のような木を二人引きの鋸で五センチ程に輪切りにし、鉋で細かく割る、それ

を乾燥小屋に入れて乾燥させて使う。

トラクターには大きなチヨルカ用のタンクがあり、これに入れて蒸し焼きにして木炭化してガスを発生させてエンジンを動かす仕組みのよう。

この作業は一カ所に座り込んでできるので、そんなに苦痛ではないのだが、座り込んで余り動かないので夏になると蚊とブヨの大群が押し寄せて来て、栄養失調の身体から更に血を取ろうとする。仕方ないので草を燻して、煙の中で作業しなければならぬので、目をやられてショボショボになる。

ところがロスケの兵隊は平気でいる。見ると蚊やブヨは全然ロスケには付かないのだ。ロスケの食事は殆どに油が入っているので皮下脂肪が厚くて、血管まで届かないのを蚊やブヨが知っているみたいだ。

皮下脂肪が多い事は寒さにも強く真冬の零下三〇度以下になる時でも夜間六時間交替の衛兵勤務を平気でやっている。零下二〇度くらいだと今日

は暖かいと言って耳を出している。

だからナポレオンもドイツ軍も冬の戦いで皆敗れたのだと思う。

シベリアの夏

シベリアの夏は日が長いので夕食後も、暗くなるまで相当時間があるので大変助かる。特に虱取りが充分できるので一番助かる。また娯楽の時間があること、収容所で娯楽室も作ってくれた。木を削って麻雀牌を作り、毎日麻雀をやる。賭ける物がないのでなけなしの煙草を賭ける。

またお盆には樽を叩いて盆踊りもやる。真ん中に焚き火をしてその回りで踊る。ロスケも初めのうちは見物していたが、そのうち兵隊から将校、奥さん連中まで踊り始めた。抑留者である事を忘れて踊っている、歌も声の良いのが居て、盛り上がる。楽しい一時である、お盆の間毎日踊った。

シベリアの夏は短いせいか、昆虫なども一斉に出て来る。蚊、ブヨは勿論、てんとう虫、蝶々、

蛍は大きなのがわんさと居る。とても奇麗だ。困るのはてんとう虫で、部屋の中まで入って来て、食事の中などに入り、知らずに食べるとジャリツと音がしてももの凄く臭いのだ。

望郷の詩

行く山河 越えて来れど故郷の

花の香りの 今だ消え得ず

この雲よ 東に流れて 故郷の

空に伝えよ 我れすこやかと

夏の夜る シベリアの野に蛍飛ぶ

故郷の野は いかによりしか

夏の夜 故郷忍び 盆踊り

焚き火を囲み ロスケも踊る

故郷へ出張

九月の中頃、自分は村のはずれにある橋の架け替への仕事を頼まれて十人程ロスケの兵隊一人と共に十日間の予定で出張する。

村では空き家を一軒貸してくれたので、そこを宿舎に作業をする事になる。村は全部で二十戸程の小さな村だ。その中で新聞を取っているのが二軒でラジオのある家も二軒とのこと、村民は皆良いい人ばかりだ、我々が遊びに行くと、喜んで歓迎してくれる、驚いたのはある家に行くと壁に日本の掛け図があつた事だ。どうしてこゝに有るのか聞いたが、言葉が通じなくて解らなかつた。

その主人もヤポンスキだと言っていた。夜になると宿舎にロスケの娘さん達が遊びに来る。日本では考えられない事だ。ロスケは皆民族差別は全くしない、むしろロスケの兵隊の方が嫌われている。

一緒に来たロスケの兵隊は、夜は別の所に泊まつていて、我々だけなので全く自由である、ただ灯りが無いので暗くなると寝るしかない。

せっかく娘さん達が遊びに来てくれても、栄養失調の我々には全く色気は無くもっぱら食い気ばかり。

橋は全部原木の丸太造りで、橋脚も川底から井桁に積み上げる。橋桁も丸太を渡し、その上に細い丸太を並べて造るのだ、材料は全部揃っているので余り苦勞はない。食事だけは腹いっぱい食べられるので誰も文句は言わない。

或る日、村の人が来て、馬鈴薯を倉庫に入れるのを手伝ってほしいと言つて来た。皆で手伝いに行くと、仕事は一時間程で終わった。帰りにお札として五十キロ位くれたので皆喜んで帰る。しかし我々はそれだけでは満足しない。倉庫の中はジツクリ見て来たし、錠は大きな南京錠であるがそんな物は釘一本あれば開くので問題無い。幸い真つ暗闇だし、警備も居ない。もう少し戴いて来ようとして三人でこつそり行く、錠は自分が釘で開ける。後の二人が一袋ずつ、計二袋を持ってサツと出て来た。また錠を掛けて知らぬ顔。これで帰るまで幾ら食べても大丈夫と皆張り切る。

今日は一つ俺が御馳走を作つてやろう、今日の作業は大した事ないから俺が炊事当番をやるよ、

と引き受けた。まず鉄板に釘で細かく穴を開けて
卸し金を作り、芋の皮を剥き卸し出した澱粉も一緒
に団子を作り、これを肉のだしで団子汁を作った。
ロスケの女の子が一人遊びに来ていて欲しそうな
顔をしているので食べさせてやる。ハラショ、ハ
ラショと喜んで食べた。皆も仕事から帰って、久
しぶりの御馳走に腹いっぱい食べて大いに満足し
た。

時々村民の家に遊びに行く、ソ連の農業はコ
ルホーズ（民営）とソフホーズ（国営）農場に分
かれているがシベリアは殆どがソフホーズである。
従って作物が良くても悪くても関係なく、一日の
ノルマさえやれば良い方式なので共同農場の作物
はまったく出来が悪い。草取りでも一日何メート
ルとノルマが有り、ノルマだけやれば後は幾ら草
が生えていようが知らぬ顔、作物と雑草とが競争
している。芋等は植えた種より収穫の方が少ない
状態と言う。初め土地が悪くてできないのかと思
ったがそうでなく、各自、自分用に自由になる土

地が約一反程あり、それは物凄く良くできている
のだ。自分の畑でできた物は売ろうが食べようが
自由にできる。北海道以上に良くできている、や
はり人間には欲を持たせなければ絶対に進歩しな
い見本である。

煙草は専売でないので自由に作っている。

住宅は皆丸太作りで、どこも一間しかない。ペ
ーチカと寝台が二台位で、子供は床に寝る、夜は
豚も鶏も一緒に寝る。豚は犬と同じで家族の後を
ついて歩く。ロスケの民家にはトイレがなく、家
の回りで野天でする、後は豚が始末する。自分達
も用を足す時は棒を一本持っていないと豚に尻を
なめられる、どこにも居ないと確認してからして
も匂いで豚が飛んでくる。

ロスケのM中尉が巡回に来た。「もし民家で仕
事を手伝っても、何にも報酬はくれなかったら言
え、自分が貰って来てやる、絶対にただで働くな」
と言う。さすがソ連である。

或る日、自分は風邪を引いて熱が出たため、一

日作業を休んで寝ていたなら、隣の家のお婆さんが遊びに来て、どうしたと聞くので、ボルノイ（病氣）でガラワニハラシヨ（頭が悪い）と言うと、額に手を当て熱を計り、家から薬と卵を二個持って見舞いに来た。薬を飲めと言うので貰って飲む、アスピリンのようだ。「マダムイエス（妻が居るか）」「イエス（居る）」。「マーリンキイエス（子供居るか）」「イエス（居る）」自分は独身で妻子はいないが嘘を言った。ウンウン頷いて、もうすぐ帰れるから元気を出して病気を治せ、と一生懸命慰めてくれる。まるで自分の母親のようにとでも感激した。国民同士はこんなにも親しめるのに、なぜに国は戦争をしなければならぬのか疑問が残る。

幸い薬も効いたのか一日で熱も下がった。

作業も予定通り終わったので、隣のお婆さんにお礼を言って、無事収容所に帰る、十日間で皆太って元気になった。この十日間の出張作業はソ連の民間人との接触もありソ連を知る上でも大変貴

重な体験であった。

シベリアの秋

シベリアの秋は早い、九月に入るともうすっかり秋の気候である。秋で良いのはキノコが出る事だ。北海道にあるキノコは全部ある。ポリポリ等は草の中に生えているのが一カ所見つかる、とても取りきれないだけある。キノコは余り栄養はないとの事であるが、美味しいので毎日腹いっぱい食べる。

もう一つ美味しい物がある。それは五葉の松の実（松笠）で、コレが高い松のてっぺんに三つか四つなっている。一つが北海道のトウモロコシ位の大きさで中にギンナンのような実が百個程も入っている。木の一番高い所にできるので種を広くばら撒くための自然の摂理なのであろう。だからその実を取るためにはその木を倒さなければ手に入らない。

この実はとても油が強く、焼くととても美味し

い。ロスケも大好物でロスケが先に見つけると我々の口に入らない。だから見つけるとロスケが来ないうちにサツと倒して実を隠しておき、昼の休憩時間に焼いて食べる。

ロスケは葡萄の葉を煮てその汁を美味しいと飲んでい。美味しいから飲めと言うので飲んで見たがただ酸っぱいだけで何も美味しくない。

ロスケは酸っぱい物が好きでパンをはじめ漬物も皆酸っぱい。

ダモイ

十月末頃突然部隊に帰還命令が出た、しかし自分は技術者として残留を命じられた。残留組は五十人との事、帰還組が身体検査を受けたところ、栄養失調で帰れない者が出た。ロスケは身体の悪い者を帰すとロスケの恥じになると帰さないらしい。欠員が出たので、中隊長が「東島帰りたいなら入れるように頼んでやるぞ」と言ってくれた。しかし自分はロスケは嘘ばかり言うので、帰すと

言ってこゝよりもっと悪い所へ連れて行かれたら困るので「いいです」と断った。

余りにも帰すと言う事が突然だったので信じられないのである。

皆と別れた我々はこゝで作業をするものとはかり思っていたら、我々は別の収容所に行くとの事、結局残った意味が無くなった。トラックでイマンの町外れにある収容所に移転させられた。

新収容所

今度の収容所は町の近くにあり、古い建物であるが相当大きくやはり一千人位は居るようだ。

イマンは満州の虎林（フーリン）と川を挟んで向かい合っている国境の町である。冬は川が凍結するので徒歩でも渡れるため、満州に入れば何とかなると思いい、脱走する者がいるのだが、国境警備隊に発見され銃殺されトラックに乗せられて戻って来ると言う。ロスケは見せしめのためわざと収容所に連れてくるのだ。

新しい収容所では知った者もないので寂しいと思つたが、同室の他の者も皆新しく来た者ですぐ仲良くなつた。

木工場作業

最初の作業は木工場の道路が悪いので、角材を並べて道を作る作業をやつたが、別に大工作業という程のものでない。次にやつた仕事は製材された板を記号別に分けて、トロツコに積み、引き込み線のホームまで運ぶ仕事であるが、これがドン・ドン製材されて出てくるので、大変な作業だ。工場は二十四時間操業なので、勤務も三交替制で行う。製材は上下に動く鋸で、刃が十数枚同時に動くのでどんな大きな原木でも一辺に切れてしまう。だがこゝもノルマが有り、ただ引く本数だけを重視して製品の良し悪しはどうでも良いらしく、満足な板は一枚も無く皆プロペラのように曲がっている。

一番辛いのは夜間作業で製材の整理は外なので

非常に寒く、さばると寒いし一生懸命やるとすぐノビルし本当に参つた。余り作業に追われると、仕方ないのでコッソリと鋸係に故障を起こすように頼むのだ。故障の方法はロスケの目を盗んで鋸が丸太の半分位迄来た時に真ん中の刃に鉄の棒を噛まして刃を折るのだ、そうすると機械を止めて刃を取り替えるのに二・三時間は掛かるので、その間ゆっくり休める。悪い事には実に良く頭が働

く。
次に回つて来た作業は、貨車積の作業で、これは貨車が入つた時に行つて積み込みをやる。時間が決まっていないので、昼の時も、夜中の時もあ

る。この作業は待機時間の方が多くて割合楽な作業であつた。
また貨車の車軸に油壺が有り、この油を盗んで来て部屋の灯りに使えるので大変助かつた。イマ

ンの町のすぐそばに有る収容所なのに電気もないのである。

食料工場

次に行ったのが食料工場の作業。主な作業は貨車降ろしや工場の清掃袋詰め、製粉等である。

貨車降ろし作業は豆の袋や麦の袋を卸すのであるが、これがソ連の鉄道は広軌鉄道なので貨車も百トン貨車で、まるで倉庫のようだ。袋も一袋百キロもあり、肩に乗せて貰うのだが歩くのが大変なので力の無い者はとも歩けない。だがこゝでは昼食に豆の煮たものを出してくれるのでいくらか助かる。ただ横で番犬が食べている物を見ると、肉の入った美味しそうな物を食べている。我々よりも犬の方が余程良い物を食べている、アア犬になりたい。

でも食料工場の仕事は、少しずつでも何らかの物を手に入れて来るので助かる。ソ連では日本のような風呂敷がないので、何でも綿の粉袋に入れて持ち歩くのでこの袋を欲しがらる。

一緒に来る歩哨が時々捕虜に、帰りに袋を盗んで来るように頼む事がある。今日頼まれたと分か

ると忽ち全員に伝わる。なぜかと言うと、その日は歩哨が工場の守衛に今日は大丈夫と言って、検査をさせないのだ。検査をさせると袋がバレるからだ。皆この時とばかりに靴下や靴の中、ズボンの中に豆や粉を詰めて来るのだ。

宿舎近くなつてから歩哨は袋を貰い喜んでいて。皆にも食べ物を持って来たかと聞き、持って来たと言うとニコニコして喜んでいて。その点ソ連は自分に関係ない事は絶対に文句は言わない。歩哨は捕虜が逃げないように監視していれば良い訳で作業能率がどうであれ、また何を持って来ようが、文句は言わない。しかし工場の守衛は実弾入りの銃を持っているので、何かで見つかつても絶対に逃げないように注意を受けていた。逃げれば撃たれる事もあるので、危険なのである。この工場にはドイツ軍の捕虜も来ていたが我々よりもずっと警戒が厳しいようである。ドイツ人もロシア人も我々が見た目では変わらないので逃げ易いのかも知れない。

町の風呂場

今日は町の風呂屋に連れて行ってくれと言う。もう何カ月も風呂に入っていないので大変嬉しかった。日本の銭湯のイメージで行くと、何と前の収容所の風呂を大きくしただけの物で、階段があり、違うのは壁に穴が有りその穴に水を入れると、蒸気が噴き出す仕掛けでやっぱり蒸し風呂なのだ。木の枝が置いてあり全く山と同じ、それでも久しぶりの風呂なのですっきりとし何だか身体も軽くなった気持ち。

町と言っても日本のような店は無い、すべてが配給制なので店はいらなのだろう。住宅が固まっているだけ。建物は丸太作りで無く、角材を積んで作ってある、丸太よりずっと作り易い感じがする。

駅の除雪作業

今日は駅の除雪作業に行く。五十人程で作業をするが除雪する程の雪は無い。ベニヤ板に棒を付

けただけの道具では満足な事ができる訳もないが、冬なので他に余り仕事が無いのだろう。山と違って工場以外には捕虜を使う場所も無いのだろう。

ちようどシベリア鉄道の客車が入って来た。見上げるような大きな機関車で客車も我々が乗って来たものとは雲泥の差だ。乗客が捕虜を物珍しげに見ている、その中に一人映画から抜け出したような美人がいたのが印象的であった。

土木作業

三月に入り、町外れにアパートを建てるらしく、その基礎工事に回された。この辺はツンドラ地帯なので冬に穴を掘らないと水が出て、コンクリートを打てないらしい。ところがこの季節では水どころかカンカンに凍結していて、幅七十センチ長さ一・五メートルの穴を掘るのであるが、一日十センチも掘れるかどうかという固さだ。

鶴嘴の先が一日で丸くなるのである。

石なら割れるが土の凍ったのは割れもせず全く

手に負えない。

翌日も同じ作業を続ける。辺りを見ると雑木が沢山生えている。自分はこの馬鹿げた仕事はやってられない、監督にあの木を取って来て、この上で焚いた方が早いと説明する。

監督はやって見ると言う、早速木を集めて穴の上で燃やす。それを見て他の連中も皆真似して火を焚く。

これは調子が良い、皆焚き火を囲んで雑談に花を咲かせる。どんどん燃やすので寒くない。二時間位焚いた頃監督がもうやれと言う。自分はまだ駄目だと言ってドンドン燃やす、三時間近く焚いてから「よし、始めよう」と火を除けて掘る。解けていて二十センチ程もアツという間に掘れた。しかしその下はまだカンカンに凍っていた。それでも火を使わないよりずっと能率が上がるし身体も楽で一石二鳥だ、監督も納得したようだ。それからは毎日火を焚くのが仕事になり大変助かった。皆からも感謝された。

ただ、木が段々なくなり遠くまでとりに行かなければならなくなった。

三月も中を過ぎると少し暖かくなってきた。今度は掘った穴にコンクリートを入れるのであるが、監督が見ていないとサッサと砂利と砂・セメントを練らずに穴の中に入れて、十センチ程のコンクリートを流して終わり。この上にどんな建物が建つか知らないが、春になって凍土が溶けた時どんな事になるのか、これをやったのは自分の組ばかりでないのか、重い建物であれば持たない気がする、監督が首になるかも？

ダモイ（帰還）

四月初め作業から帰ると、医務室で呼んでいるとの事、皆は帰れるのでないかと言う。昨日他の収容所から帰還すると言う部隊がこの収容所に泊まっているのは知っているが、帰るにしても自分一人と言う事はない、かと言って医務室から呼ばれるような心当たりもない、まあ行ってみれば分

かるだろう。

医務室に行つて名前を言うと、女医のところへ連れて行かれた。女医が後ろを向いてズボンを下ろせと言う。恥かしいがその通りにすると尻の肉を掴んで「ハラシヨダモイ」と言った。自分は咄嗟の事でポカンとしていると、「チビヤダモイ（お前は帰る）」と重ねて言った。女医の机の上に自分が前の収容所の時ゲペウが書いた書類があったのである。それで大勢いる中で自分で自分一人だけが選ばれたのか納得できた。その書類には「天皇陛下は悪い人です」と、書いてあるはずで、それはゲペウが勝手に書いたものであるが、他の者には分からない。多分自分は洗脳されていると見たのかも知れない。

部屋に帰ると皆待ちかねたようにどうだったと聞く。自分は笑いたいのを我慢して「イヤ別に何でもない、前の収容所の事を聞かれたのだ」と言つたが皆なかなか信用しない。寝る時間近くなつて、「実は帰れる事になつて明日出発する事にな

つた」と言つた。皆しばらく何も言わない。自分も皆一緒に帰るのでないので何か悪い気がする。昨日帰還のため来た部隊の中で身体検査の結果、帰れない者が出て、自分はその補充になつたのだ。前の時は補充を断つたが、今回は断るも何もソ連側で決めた事である。

同室の者からもし無事に帰れたら自分の家に元気でいる事を伝えて欲しいと皆から頼まれる。本当に帰れたら必ず廻るからと約束して、小さな紙に皆の住所を書いて持つ。だがまだ本当に帰れるかどうか、だれもが疑問に思っている。

翌日、知らない部隊にただ一人入り、皆に送られて駅に行く。列車は貨物車で上下二段になっている。扉には別に錠はかけてない。列車は一路シベリア鉄道でナホトカに向け出発する。線路は広軌鉄道で安定感があるためか路床は相当悪く、物凄く振動で寝ていけない位である。

来る時は冬で分からなかったが、シベリア平原には至るところに飛行場があり沢山の飛行機が見

える。これならソ連ととともに戦争したら北海道など毎日爆撃を食った事だろう。

二日程でナホトカに着いた、今度は砂浜でなく幕舎が用意されていた。こゝで船が来るまでいるらしい。

毎日する事もなく、自分は部隊が違うので知り合いもないが、それでも帰れるかも知れないと思ふと何か心が浮き浮きする。しかしまだ本当に帰れるかどうかは疑問である。夜になると共產主義の映画を見せられる。また日本民主グループと称する連中の指導で赤旗の歌を教えられる。赤旗の歌を覚えなないと帰さないと脅かす。「我が民衆の旗赤旗は」と毎日歌わされる。我々が着いて三日目位に他の部隊が来た。ところが隊長が階級章を付け、部下に将校行李を担がせて来たのを見て、民主グループの怒りをかい、「まだ軍人精神が抜けていないから帰されない、もう一度収容所へ帰れ」と全員帰されてしまった。

民主グループが凄い力を持っている事が分かつ

た。心ならずも赤旗の歌を一生懸命練習する。民主グループの連中だつて、ただ楽をしようと洗脳した顔をしている者も多い筈。その証拠に皆血色が良い、こゝの食事は今までより大分良い、毎日する事もなく船を待つ。

帰国船

約一週間後、今日船が来るので準備せよと命令が出る。皆うきうきと準備する。準備と言つても何も無いのですぐできる。自分は山にいる時に作った箸や箸箱、一部書き留めてあつたノート等も隠して持ったが幸い持ち物の検査は無かつた。

岸壁に出て船を待つ。乗船者は二千人程いるらしい。しばらくして誰かがあの船でないかと言つ。見ると一隻の貨物船がこちらに向かつて進んで来る。どうもそうらしいとじつと目を凝らす。やがて船尾にチラリと日の丸の旗が見えた。ワツ日本の船だ日の丸が見えたぞと叫ぶ。ワツと歓声が上がる。船はどんどん近付いて来て誰の目にも日の

丸が見える。日の丸がこんなにも美しい物と思わなかった。皆の目から涙が流れる自分も涙が止まらない。今度こそ本当に帰れるのだと思うと、今までの苦労も一遍に吹き飛んだ。

船は静かに岸壁に横付けになる。甲板には白衣を着た看護婦さん達が五、六人と船員や関係者と思われる人々が盛んに手を振っている。我々も夢中で手を振る。

やがてタラップが付けられて乗船が始まった。船の上から走れ走れと怒鳴っている。どうしてか分からないが皆走る。そうでなくても心は急いでいるので自然に走り出すのであるが、とにかく船の上で止まっていられないのでそのまま一気に船倉まで入る。

やがて船は動き出した。しばらくして甲板に出ても良いと言うので出てみると、船はもう岸壁から大分離れている。小さな船が一隻本船の後について来ている。ロスケの将校が抑留者の受け渡しの手続きのため、本船に乗って来ているので、作

業が終わるのを待っているのだとの事。船員の話では接岸の時間をそれ程短時間に決められているのだと言う。そのため走れと言っていたのである。時間になるとたとえ乗り遅れた者がいても船を離さなければならぬのだ。

やがて引き継ぎが終わり、ロスケの将校は走っているまま小船に乗り移り手を振りながら別れて行った。

ロスケの船が遠く離れた時、思わず「ロスケの馬鹿野郎」と大声で怒鳴った。これがせめてもの腹いせである。自分だけでなく、あっちこっちで怒鳴っている。

何か本当に帰れるなんて夢を見ている感じだ。だが夢でない、間違いなく日本の船で日本人の看護婦さんが乗っている。久しぶりに見る日本人の女の人がとても美人に見える。

思えば山の収容所に居た時、ゲペウの将校にがつちり脅かさされ、頭にきていたが、この度帰還の幸運を与えてくれたのもゲペウだった。

自分は狡くて要領が良いので他の者より比較的に楽な仕事が多かったので体力もそんなに消耗していない。

本当に可哀想なのは元々体力もなく、真面目で狡く立ち回れない者達で、栄養失調で帰還もできない者も。

今日から米のご飯を腹いっぱい食べられると思っていたら、夕飯が出たので見ると、白いご飯には違いがないが、ドンブリに半分しか入っていない。説明を聞くと、今まで柔らかい物ばかり食べていたので、急に固いご飯を沢山食べると死ぬ者が出るなどの事。従って段々と胃が馴れるまで量を増やさないと駄目だと言う。仕方ない我慢するしかない。夜寝ていても帰れるのだと思うと船の振動が心地よい。

二日目、風の葉だと言って白い粉を頭から全身にかけられた。皆真っ白だ。だが本当に風は死んだ。

三日目、船は舞鶴港に入った。岸壁には沢山の

人々が迎えてくれる。腰に棒を下げた警察官が誠に奇異な感じを受ける。下船が始まった、待望の祖国への第一歩だ。感激で足が地に付かない気持ちだ。

昭和二十二年四月二十四日 帰還船大邦丸

まず薬の入った細長い風呂を通って全身の消毒をしてから、大きな風呂に入る。二十年七月以来のまともな風呂だ、日本人はやっぱり日本式風呂が一番だ。何年ぶりかで部屋らしい部屋に落ち着く。とうとう帰ってきたのだ、生きて帰れたのだ。

自分達は無事帰って来たが、まだシベリアに残っている戦友が沢山いるので手放しでは喜べない。翌日、復員局の係官から色々調査を受ける。

自分は同日付きで伍長に任官すると言う。二十年八月十四日で召集解除になっているのに変な話だ。どっちにしても、もう軍人でないので関係ない。

早く帰った者は新しい服を貰ったらしいが、もう無いとの事でシャツや下着だけ貰った。その外に三百円を貰った。また戦前のお金を持っている

者は新しい金と交換してくれると言う。自分は麻雀で勝った金をやはり三百円程持っていたので換えて貰った。合計六百円になり大変な金持ちになった気分だ。皆はこんな金もう駄目だと尻拭きに使ったが、自分は辛抱強く持っていたがやはり正解であった。

その夜最後のお別れという事で演芸会が開かれた。自分と帰りが一緒だった東京の藤波君も女装で「娘船頭さん」を踊った。

翌日、いよいよ復員列車で故郷へ向かう。列車が少ないのか復員列車なのに一般の市民も乗っている。大きな竹の子を三ツ程もって売りに行くという青年に会った。戦後の日本の食料事情が悪いという事を聞く。

上野駅に着き、こゝで乗り換えて北海道に行くのだが、時間があるので駅前の街に出て見る。道の両側に屋台の店がずらりと出ている。食べ物屋が多い、美味しそうな匂いにつられて、薩摩汁を食べる。とても美味い、腹がいっぱいなのに口が

飽きない、まだまだ食べたい気持ちがある。

貰った三百円は大金だと思っていたが上野で全部無くなった。自分はまた他に持っているので良いが、持っていない者は大変だ、着ている物を売る者もいる。物価の高いのに驚く。再び上野から列車に乗り一路故郷の岩見沢に向かう。途中何事もなく無事岩見沢に着く。殆どの者は上野駅から電報を打っていたが、自分は知らせなかった。

駅のホームには女学生が迎えに出ていて、復員姿の自分を見て駆け寄り荷物を持ってくれる。家まで送ってくれると言ってくれたが、大した荷物でないから大丈夫ですと御礼を言っただけだ。

家に帰ると兄の子供がいて、自分を誰だかわからず、変な人が来たよと母を呼んで来た。母が来て自分だと分かり吃驚した。夜、皆が集まり無事を祝ってくれた。故郷を出て四年ぶり無事帰還できた事は本当に運が強かったのだと思う。

シベリアの戦友に頼まれた留守家族の家には全部直接回り状況の説明と元気である事を報告して、

とても感謝された。これで責任も果たした。

帰ってから聞いたところ自分の部隊は本当にそのまま帰って来たとの事。しかも初めての復員船でそれ一回でその年は終わったとの事。冬はナホトカ港が凍結するため、自分はロスケを疑っていた。一冬損をしたようだ。でもまだまだ早い方だった。

シベリア抑留者数約五七万五千人内死亡約五万五千人、ナホトカからの引き上げ者四五万三千八四九人、遺骨一万六千二六九人（厚生省引揚援護局調べ）。

自分は生きて帰ったので金で買えない経験をしたが、無念にも祖国の土を踏む事なく異国の空に眠る、自分の兄一人を含む五万五千人の御魂に安らかなれと祈りを捧げて筆を置きます。

【執筆者の紹介】

本籍地 岩見沢町

現住所 苫小牧市住吉町

生年月日 大正九年十月十一日

同居家族 妻

学歴 空知農業高中退

職業 小樽港の石炭荷役会社職員

兵歴

昭和十八年 八月 予備役召集にて樺太上敷香歩

兵二五連隊に入隊

昭和二十年 四月 齒舞に陣地構築のため移転

昭和二十年 八月 ソビエト戦が始まり、真岡が

砲撃され、真岡裏山の熊笹峠

で戦闘に参加

昭和二十年十一月 シベリアに抑留される

沿海州セミノフカ

昭和二十二年四月二十四日 大邦丸にて舞鶴に帰

還

引揚げ後、前会社に復職、苫小牧市に転勤、停年

まで勤務

生活 現在の体調は良好で、厚生年金で充分

の暮らしです。

(北海道

五十嵐 甚吉)

青春無残の追憶

岩手県 千葉 義一

弘前から満州へ

昭和十九(一九四四)年六月に十九歳で繰上げ徴兵検査を受けた後、秋頃から入隊通知が村内あちこちに届くようになった。十二月中旬、遂に役場を通し盛岡連隊区司令部から、二十年二月十日、弘前騎兵連隊に入營せよ。八日、一ノ関駅より軍用列車に乗車のこととあった。

何となく慌ただしく感じられ、身の整理、学校時代の教科書、ノート類、大事な物をリングの木箱に詰め、「除隊まで保存のこと」と墨で書いて座敷の押入れの奥に押し込んだ。親類縁者の挨拶廻り、近隣神社の武運長久祈願などに忙しかったが、当時若者は皆兵隊に行く時代なので今後の運命、不安、悲愴感はなかった。

出発三日前の縁者、知人を呼んでの「立ち振舞」